「非劇場型政治」の時代

最近、朝のワイドショーに、いわゆる「政治ネタ」が少ない。少し前までは、政治家同士の攻防を面白おかしく取り上げるのが定番だったのに、どうしてしまったのだろう。

旧知のキー局の関係者に聞いてみると、「主役、悪役がいないことですね。端的に言うと、それでは数字（視聴率）が取れないわけですよ」と、明快な答えが返ってきた。

ここ数年続いた「ワイドショー政治」を生み出したのは小泉純一郎元首相だ。郵政選挙の刺客騒動が典型的だが、世論が飛びつくような対決型の話題を次々と繰り出し、お茶の間を「小泉劇場」のとりこにした。

小泉流は、テレビ政治の時代を泳ぎ切る一つのモデルとなり、その後一年ごとに交代した歴代首相も少なからず、その姿を意識した。内部の政争が絶えなかった民主党政権も、意図的であったかは別にして、ワイドショーのネタを提供し続けた。その流れが、微妙に変化しつつある。

確かに安倍晋三首相は、高支持率は維持しているが、それほど個人的な人気があるようには見えない。黒幕的なドンもいなく、閣僚も党幹部も地味。キャラが立っているのは麻生太郎副総理くらいだ。大勢誕生したはずの一年生議員も、往時の小泉チルドレンや小沢ガールズと違い、何をやっているのか分からない。

野党の責任も大きい。いまだ党内で足の引っ張り合いをしている民主党の体たらくは、客席を萎えさせる。一時は注目を集めた日本維新の会の橋下徹共同代表も、自らの発言問題で失速した。野党の自滅で、与野党の対決構図が全く成り立っていないのだ。

「自民党の一強状態の下では、多少の小競り合いがあっても結果は見えている。それじゃあ、視聴者が付いてこない」。テレビ関係者はこうも言った。これまでは先が読めないから、政治が面白かった。展開が分かってしまっているドラマには、だれも興味を示さないというわけだ。

二十年前、小選挙区制を導入した日本は、政権交代可能な二大政党制の確立を期待した。思い描いていたのは、政党同士の分かりやすい政策論争であり、時折の政権交代による政治の浄化だった。当時蔓延していた政治不信を払しょくし、もっと身近で、生き生きとした政治を見せてほしいと願ったものだ。

しかし、時がたち、今、気付いてみれば、世論の政治に対する関心は冷え切り、ある種の諦念さえ漂う。民主党政権への失望の反動から来る「よりまし論」や、目先の経済のみを指標にした消極的選択が、自民党の「静かな圧勝」を生み出したのだろう。そして劇場型の政治はいつの間にか消えていた。

この「静かな政治」は、現政権が綿密に計算してつくりだしているのではないかもしれない。しかし、先日の麻生氏の「ナチス発言」は、着物の下の鎧がのぞいたようで不気味さを感じた。

『静かにやろうや』ということで、ワイマール憲法はいつの間にか変わっていた。誰も気がつかない間に変わった。あの手口を学んだらどうか」

麻生氏が言いたかったのは、憲法改正を「喧騒の中で決めないでほしい」ということだ。「喧騒」とは、冷静ではない議論というよりは、マスコミが批判的に騒ぎ立てることを指しているのだろう。

アベノミクスへの好感の影で、さまざまな重要論点がかすむ。安倍晋三首相が法制局の経験がない元外務官僚を法制局長官に据え、集団的自衛権の行使を容認するための憲法解釈変更に踏み切ろうとしているのは象徴的な出来事だろう。静かな環境の中で、たいした論争もなしに重大な決断が行われる。

麻生氏は、ナチスによる独裁体制の構築を「いつの間にか」と評したが、ヒトラーは派手な政治家だった。軍事力を背景にし、強引で情熱的だった。弁舌巧みな花形役者として、国家的な集団ヒステリーを作り出したと言われる。

しかし、われわれがこれから警戒しなければならないのは、役者のいない舞台の裏側で起きることかもしれない。劇場は静かだが、どこかでドラマは続いている。政治はつまらないと投げ出さず、よく目を凝らし、耳をすまさなければならない。＜由＞